

ガラケー——島に生まれ、島に帰る

2 メディア・ネット

一〇〇〇年代以降、iPhone に代表される「スマホ（スマートフォン）」全盛時代となつた。日本家電産業は、米中台韓に押されまくり、ワンセグ・おサイフ・着メロ・ウェブ接続サービスを、日本人向けに独自に発達させたケータイは、「ガラケー」と語尾下がりで呼ばれるに至つた。

「ガラ+ケー」とは、「ガラパゴス+ケータイ」の意。外来種優勢の「スマホ」と比べ、日本というガラパゴスに似た孤立環境で独自進化してきたハードウエア（機種）を指す呼称で、「ファイヤーフォン」とも呼ばれる。「進化の袋小路にはまりこんだ旧式ケータイ」とみなす、蔑称である。

しかし、歴史をふりかえつてみれば一九九〇年前後、モバイル文化（ポケベルやケータイの利用法）を牽引したのは、香港（当時は英領）・日本や、スウェーデン・フィンランドなど、ユーラシア大陸両端の島（半島）的地理環境の国々であつた。モバイル文化は、四半世紀前、「島」に生まれた。

民族学者・梅棹忠夫の「生態史観」（文明の生態史観 中公文庫一九九八）どおり、ユーラシア中央部の大陸帝国地帯と、東西両端の島嶼部とを対比させれば、北欧や極東もまた、どんづまりの辺境である。モバイル文化は、こうしたマージナルエリアの局地的流行として、産声をあげた。

当時のモバイル文化は、独立した「島」的地理空間における高所得・高リテラシーの新しいもの好きユーザー層なくしては、とうてい普及しえなかつた。とくに日本では、同質的小集団ごとに細分化された、若者組（年齢階梯集團のひとつ）において、仲間うちだけの縄張り「島の中の島」を構築するべく「居場所機械（テリトリー・マシン）」として、ポケベルやケータイが普及した。

それは、あたかも重ね書きのようすに実空間の背後に、無限の仮想空間を生成し、そこに「テリトリー」を構築する魔法だつた。オンライン上の「結界」空間を、筆者は「電腦娘宿」と呼んだ。

なかでも数字語呂合わせで以心伝心する「ボケベル暗号」や、今日のLINEスタンプの先駆け「絵文字」など、「高コントラストリ暗号文」的な使われ方は、クールジャパンの前哨だつた。

その後ケータイは世界を席巻し、低所得・低リテラシー、目に一丁字なき無事の民でさえ、「低コントラストリ平文（暗号なしの文）」で使えるよう変質し、またたく間にグローバル化を遂げた。

たとえば中国において、ケータイの呼称は、「大哥大」→「小姐小」→「手机」と三度変わつた（まだまだ変わるかも）。「大哥」コワモテ兄貴のデカブツ・メカから「小姐」かわいいギャルの小物へ、さらに今では「手机」ハンディマシン」と素っ気なく呼び捨てられる間に、グローバリズム（新経済帝国主義）に適合する形で、そのソフト・ハードは、スマホへと急速に転換していく。とはいへ、「独自進化の袋小路」ガラパゴス」というメタファーそのものが、ミスリーディングではないか？ 日本はけつして孤島ではないし、ガラパゴスの生態系もけつして停滞しておらず、今この瞬間も絶えまない進化を続けているからだ。

進化とは、ゆるやかに数千、数万世代をかさねることで、ひとつずつ種から別の種に変異していくメタモルフォーゼというのが、世間のイメージだろう。しかし、現代の最新進化学説によると、実のところはファッショ�이ように短期間で起ころ、めまぐるしい榮枯盛衰プロセスだという。

孤島ガラパゴスの固有種ダーウィンフィンチ（ズメに似た小鳥）は、今なお体型やクチバシの形

をめぐって、年ごとの環境変化による淘汰圧力を受けることで、めまぐるしく雑種交配と異種分岐（枝分かれ）とを繰り返し、ときに乾燥や飢餓の危機に襲われて絶滅寸前に陥りながらも、進化し続けている。ガラバゴスは、絶海の孤島でありながら、今なお生きた進化の最前線でもあるのだ。そもそも、なぜ生物種はあんなに多いのか？ 八〇万種以上を数える昆虫をはじめ、なぜ、あれほどまでに細かく、分岐していくのか？

なぜ言語はあんなに多いのか？ 人口七〇〇万人のバブアニューギニアに、八〇〇以上の言語が存在するのは、多過ぎないか？

なぜ服はあんなに多いのか？ 每年毎年、新しいモードが生まれる豊穣さには、驚かされる。結局なぜかといえば、生命や情報は、つねに生まれ滅び、分岐し続ける運命にあるからだ。生物種・言語・ファッショントイすべて、その生命力の本質は、無限に分岐し、差異を生み出す「多様性」にある。ファッショントイ分化も生物進化も、論理的には同じで、ひとしく生命の営みにすぎない。

ちなみに「ケータイ」という呼称を、学術書で初めて使ったのは筆者らであるが、一時はすべてが「スマホ」に塗り変わる予測すら立てられた。結果的に現在、双方の良さが、見直されている。「ケータイ」という総称の下で、「ガラケー」と「スマホ」が併存し、両者のいいところをした、「ガラ+スマ」「ガラ+ホ」と呼ばれる、ハイブリッド（雑種）ケータイさえ生まれている。

実は筆者も流行りの「スマホ」に飛びついたものの、まもなく「ガラスマ」に乗り換えて、現在に至る。なぜなら、スマホは自由度が高すぎるから。オジサンがスマホを使うと、液晶のバー、チャルなボタンをいじるうち、ふとした操作ミスが大きな誤作動に……。カメラや音声サービスが突如、

起動し始め、知らぬ間に静肅な車内空間でシャツタ一音を鳴らしたり、緊迫した会議の席上、合成アニメボイスが突然しゃべり出したりして、周章狼狽しかねない。

この点、「ガラスマ」なら、安心。地図アプリなどスマホ機能を駆使しつつ、物理ボタンは誤作動が少ないし、二つ折デザインは、シエルのように、ヤワな液晶画面を包み込んでくれる。結局は、島国ニッポン人らしく、「シャイ」な気質こそが、「ガラスマ」人気を支えてたりして……。

いやいや元々、日本人にとってのボケベルやケータイといったモバイルメディアは、誰かとつながる（オン）だけでなく、誰かとの関係を遮断（オフ）する武器、いわば「闇与シールド」として、愛されてきたのだ。目の前の親・教師・上司という現実が煩わしいとき、人はケータイをいじり、液晶画面の向こうへワープすることで結界を張り、瞬時に嫌な現実を消去する。逆に、ケータイの中の誰かが煩わしいとき、人は「いま電車が来た！」「急に親・教師・上司が呼んでる！」といった口実で、ケータイの中の人間関係をオフにしてしまう。この両義的なオン・オフ 2WAY の二刀流こそが、モバイルメディア最大の利点。その意味では、「スマホ」も「ガラケー」も大差ない。

われわれは、グローバルなプラットフォーム上に、超ローカルなアプリ（『国盗り合戦』的な位置情報ゲームなど）を走らせつつ、二一世紀をたくましく楽しく、サバイバルしていくだろう。（藤本憲一）

庫二〇〇一

藤本憲一「ボケベル少女革命」エトトレ 一九九七

ガラケー

ビッグデータ——ゴミ情報の貝塚を掘る

ビッグデータとは、デジタル（電子）化されているとはいっても、本質的には巨大で雑多なノイズ（ゴミ）情報の堆積を意味している。ユーザーが各段階で情報をやりとりしつつ、その旨味や滋養を味わい、しゃぶり尽くした後の廃棄物であり、新陳代謝の最終形、ほとんど排泄物である。

俗に、「よそもの・バカもの・わかもの」が世の中を変革する力をもつという。一八七七年、日本人が無視してきた古代のゴミや排泄物の山を、アメリカ人動物学者エドワード・モースが、大森貝塚として「発見」した。その一〇〇年後、靈長類学者・山際寿一は、アフリカで現地人が見向きもしないゴリラの糞を洗って内容分析した。よそもの・バカもの・わかものパワーで、ゴミや排泄物は宝に化ける。ギリシヤ神話のミダス王のように、触れるものすべてが黄金に変わる。

ツイッター・フェイスブックなどSNS（ソーシャルネットワーキングサービス）上の他愛ないおしゃべりやスタンプ（絵文字）のやりとり、スーパー・コンビニPOS（ポイントオブセールス）の購買履歴など、日々、天文学的単位のゴミ情報が飛び交っている。これぞ、ビッグデータである。二一世紀のマーケティング手法は、経済指標や国勢統計といった量的データ、インタビューや参与観察といった質的データから、それらを質量とも凌駕する、ビッグデータ分析へ移行しつつある。ICTの発達（コンピューターの並列化・クラウド化）により、ビッグデータを逐一整理、分析処理したうえで、しかるべきユーザーに、しかるべき情報をピンポイントで発信していくことが可能に

なったからだ。たとえばGoogle（グーグル）社の場合、ネットでの検索サービス利用は無料だが、個人個人の検索履歴に応じてピンポイントで広告表示する、AdWords（アドワーズ）というビッグデータを活用したビジネスモデルで、巨大な広告費を得ている。

そもそもメディアの世界では、ほぼ例外なく「軍・用・情の三段階法則」が成り立つ。古代の風からインター・ネットまで、まず軍事用に開発されたニュースメディアが民間のビジネス（用事）に転用され、遊びや情事に転用されていく法則である。

かつて軍事においては、「象の檻」（通信傍受アンテナ）のインパクトある外観や、「エシユロン」（全世界傍聴・盗聴網）の暴走ぶりが、ニュースをぎわせた。今や軍事用の通信傍受（および解析・迎撃）システムが、国家独占物ではなくなり、ビッグデータ分析という形で、商社や広告代理店、マーケティング・コンサルタントといった民間の情報産業レベルで、運用可能となつたのだ。

たとえていえば、見た目はちっぽけなコンビニといえども、その情報傍受・解析・迎撃（売れ筋商品の陳列）能力において、最新型イージス艦に匹敵する。もちろん、イージス艦は、個艦としては、平凡な駆逐艦にすぎない。その背後に、データ分析・総合・立案できる統合戦略本部が控えており、最前線と後方本部が電子ネットワークで直結していてこそ、力を發揮する。

同様に、コンビニの各個店も、購買履歴データを取り込むイージス艦役を果たしている。その背後で、チーンストアのマーケティング本部が、ビッグデータを分析・総合・立案する後方支援をしてこそ、それぞれの店頭で販売力を發揮できる。

ビッグデータが注目される以前、おしゃべりやレシートは、ただのノイズであり、無意味なゴミ

にすぎなかつた。それらをモノ好きにも拾い集め、系統的に独自の意味づけをし、学として成り立たせた点で、今和次郎による「考現学」の先見の明（一九二七）は、時代を超えていた。かの名高いM.I.S.（英國機密情報部）誕生（一九〇九）に遅れをとつたとはいえ、「傍聴・盗聴の總本山」C.I.A.（米国中央情報局）誕生（一九四二）よりは、はるかに先んじていた。現代風俗研究者・路上観察学徒は、ビッグデータ的なノイズ情報の貝塚掘りに先鞭をつけた独創を、もつと誇つていい。

「考現学」とビッグデータ分析を比較していえば、学術（非営利）目的VS.商業（営利）目的という対立点だけでなく、属人（個人）的VS.離人（法人）的という対立点が見出せる。「考現学」の好奇心はつねに、「面白そうな情報」から「より面白い人間社会」の探求を志向する。それに対し、ビッグデータ分析は、「儲かりそうな情報」から「より儲かりそうな未来の購買ニーズ」を志向する。そこでは、人間や社会のありようは捨象されてしまう。それは、環境医学者・中川米造が、「検査データだけを見て、患者に触れず、顔すら見ない」と現代医学を批判した論点に通じるだろうか。では、両者は永遠に水と油かといえば、実はフシギなハイブリッド形態が生まれている。それは、孤高無賴の「私立探偵」^{*}が、情報化・組織化・営利法人化された、現代版の「マーケ探偵」である。たとえば、行動観察研究所によると、その実績として「駅構内での利用客の迷い行動の実態観察」（近鉄とコラボ）、「キッチンおよび洗面所でのユーチャー実態観察」（パナソニックとコラボ）、「イマドキ男子のグルーミングに関する行動実態調査」（マンダムとコラボ）が挙がる。

もっとお手軽なのが「覆面調査員」。ウェブサイトでは、いろんな「覆面調査員」公募が花ざかり。「覆面調査員ミステリーショッパー」^{**}によると、「ミステリーショッパー」とは……一般のお客様

にまぎれて店舗に来店し、定められた調査項目に沿つて評価をして頂き、調査レポートを作成・提出して頂きます。普段、店舗を利用する中で感じる店舗に対しても満足度や不満・改善すべき点などを顧客目線で調査します」というミッションを与えられる。

肝心のギャラは観察対象の店舗形態によって異なるが、一回一五〇〇円（クリーニング店）から、八〇〇〇円以上（温泉旅館）まで。「謝礼金には調査の際にかかる費用（飲食代や購入費・交通費・通信費・レポート作成料）が含まれています」とのことだ。ほとんどは、実費・経費分のみでギャラは消えてしまう。古き良き探偵なら、「調査実費はギャラとは別。経費は別途、全額請求させてもらいます！」と啖呵を切りたいところだ。実費・経費のみとは、あまりに寂しい探偵業の零落ぶりだが、こうした限りなくボランティアに近い「マーケ探偵」業に憧れて、応募者が殺到しているらしい。実はビッグデータ分析が全盛になる以前から、「サーチャー」という情報検索のプロ職種があり、「検索技術者検定」という公的資格もあった。が、今や検索術は、専門技術というよりも、しだいに一般市民のメディアリテラシーとして、生存技法化しつつある点は、まちがいないだろう。

（藤本憲二）

藤井大洋「ビッグデータ・コネクト」文春文庫 二〇一五

今和次郎「考現学入門」ちくま文庫 一九八七

藤本憲一「生活財生態学法——アートと日記をフィールドワークする」工藤保則・寺岡伸悟・宮垣元編〔質的調査の方法——都市・文化・メディアの感じ方〕法律文化社 二〇一〇

* <http://www.kansatsu.jp> ** <https://www.mysteryshopper.net.jp>

アラサー	居場所	キャラ	孤独死	無縁社会
草食系	イクメン	シンドローム	LGBT	逆ギレ
D V	ゆとり世代	紳	炎上	新型うつ

今どきコトバ事情

現代社会学単語帳

INOUE Shun and NAGAI Yoshikazu
井上俊/永井良和
[編著]

リスク社会	終活	ググる	異常気象	ソーシャルメディア
スクールカースト	パワハラ	ミシュラン	ビッグデータ	就活
アイドル	認認介護	派遣	ストーカー	つっこみ
婚活	プレゼン	フタバハウス	ボランティア	ネットウヨ

現代ニッポンの社会文化のあり様を照らし出す

今を読みとく55のコトバをとりあげ、
その起源や由来、流通の過程、類語との関係等を
わかりやすく、おもしろく解説。

ミネルヴァ書房



今どき「コトバ事情」

現代社会学単語帳

永井 良和 俊
[編著]
湖嶋謙



ISBN978-4-623-07521-8
C0036 ¥2000E



定価(本体2,000円+税)

絆	キャラ	孤独死	LGBT	逆ギレ
草食系				
D V	ゆとり世代			
リスク社会		ググる	異常気象	ソーシャルメディア
スクールカースト	パワハラ		ビッグデータ	
アイドル	認認介護	派遣	ストーカー	つっこみ
婚活	プレゼン	フタバハウス	ボランティア	ネットウヨ

55のコトバ

アイドル/アラサー/オタク/キャラ/終活/スクールカースト/ファストファッション
ゆとり世代/炎上/ガラケー/ググる/クレーマー/ソーシャルメディア
ネットウヨ/ビッグデータ/イクメン/LGBT/婚活/さずかり婚/ストーカー
草食系/DV/ペットロス/自宅警備員/就活/宅配/派遣/パワハラ
ブラック企業/プレゼン/ワーク・ライフ・バランス/居場所/おひとりさま
下流/逆ギレ/孤独死/コミュ力/つっこみ/無縁社会/除菌/食育/食材偽装
新型うつ/シンドローム/認認介護/ミシュラン/メンタル/異常気象/絆
グローカル/里山/想定外/風評被害/ボランティア/リスク社会

今どきコトバ事情
—現代社会学単語帳—

2016年1月30日 初版第1刷発行 〈検印省略〉

定価はカバーに
表示しています

編著者 井上俊
永井良和
発行者 杉田啓三
印刷者 坂本喜杏

発行所 株式会社 ミネルヴァ書房
607-8494 京都市山科区日ノ岡塚谷町1
電話代表 (075) 581-5191
振替口座 01020-0-8076

©井上・永井ほか、2016 富山房インターナショナル・清水製本

ISBN 978-4-623-07521-8

Printed in Japan

《編著者紹介》

井上 俊 (いのうえ・しゅん／1938年生まれ)

大阪大学名誉教授

著 書 『死にがいの喪失』(単著, 筑摩書房, 1973年)

『遊びの社会学』(単著, 世界思想社, 1977年／新装版1999年)

『悪夢の選択——文明の社会学』(単著, 筑摩書房, 1992年)

『スポーツと芸術の社会学』(単著, 世界思想社, 2000年)

『武道の誕生』(単著, 吉川弘文館, 2004年)

『社会学ベーシックス・シリーズ』(全11巻, 共編著, 世界思想社, 2008～2011年)

『文化社会学入門——テーマとツール』(共編著, ミネルヴァ書房, 2010年)

『よくわかるスポーツ文化論』(共編著, ミネルヴァ書房, 2012年)

永井良和 (ながい・よしかず／1960年生まれ)

関西大学社会学部教授

著 書 『社交ダンスと日本人』(単著, 品文社, 1991年)

『尾行者たちの街角 探偵の社会史1』(単著, 世紀書房, 2000年)

『南海ホークスがあったころ——野球ファンとパ・リーグの文化史』(共著, 河出文庫, 2010年)

『スパイ・爆撃・監視カメラ——人が人を信じないということ』(単著, 河出ブックス, 2011年)

『南沙織がいたころ』(単著, 朝日新書, 2011年)

『定本 風俗営業取締り 風営法と性・ダンス・カジノを規制するこの国のあるかた』(単著, 河出ブックス, 2015年)